

情報革命の歴史的位相—インターネットの生成史に照らして

南 克巳

付記；この試論はポスト冷戦研究会（2001.12.15.於明治大学）で行った同名の報告の要旨 本ページの「過去の会合及び配布資料 2001 年度」に掲載を、その若干の論点の解病的増補をかねた、ややシエマーティシュな『問題提起』の形に改訂したものである（2002.1.28）

.主題 戦後冷戦体制の生成と解体 の理法追求から 再編と止揚、その方向と形態の見究めへ（1999 年 9 月同研究会第一回報告レジュメ参照）

前回では、1)この主題を 20 世紀末大旋回（71-81-91-95-）の問題としてとらえ、18 世紀末（産業革命基調）19 世紀末（独占段階轉化基調）のそれとの対比座標を設定
（末尾添付の資料(2)《歴史図式》参照）

2)その歴史的位相を扼する情報革命とそれをつづじる Net 新世界の形成に当面の論点を集約、

3)その展開の基本線を Net 先行—Net 対応—Net 包摂 説明的には、資本と国家に先立つ（抗する）Net の新世界としての形成〔テーゼ＝ポジ〕→それを受けた（あとを追う）資本と国家の Net＝新世界への対応と取り込み、そのための全機構＝全世界的リストラ、それが生みだす新しい矛盾＝対抗の絶対化と世界化〔アンチテーゼ＝ネガ〕→それを通じる Net 新世界、その原理による資本と国家の包摂＝止揚へ〔ジンテーゼ＝ポジ〕 と仮設し、まずは端的に、資本と国家による Net 新世界の包摂は可能か（「Net 対応」の基本問題）を問い、それへの第一次的な接近を試みた。

今回はむしろ一步退いて、「Net 対応」の前提となる「Net 先行」の問題（Net の生成史の独自性）に立ち帰り、そこから改めて Net の「新世界」としての性格にこだわってみたい。その意図するところは、行論のうちに示される。

【附註】1.インターネットの表記

情報の普遍的な共有のための自律分散型で世界大にオープンなコンピュータの network。同じ network(情報共有の手段)といっても、資本や国家の独占・統制下にある既成のマスメディアや「ニューメディア」との範疇的＝段階的な差異。その意味で頭文字を大文字で Net と表記する。

2..Net の編制原理（分散と共有）→基本技術とその歴史的含意

分散した仕様のちがうコンピュータ間をどうつなぐか（パケット交換→ Arpanet）

分散した仕様のちがうネットワーク間をどうつなぐか（TCP/IP→net の net としての Internet）

社会生活全般の新たな編制原理へ（「Net 先行」→「Net 対応」→「Net 包摂」）

かの『共有にもとづく個人的所有の再建』のことも、この 分散にもとづく共有（司令塔の不在）という Net の原理の展開（20 世紀型社会主義が歴史的にもちえなかったそれ！）を媒介する、とすべきではないか。

なぜ「Net 先行」—「Net 新世界」にこだわるか

前言—問題の位置づけのために —核=軍事革命（軍事的 B の包摂→冷戦対抗の論理と一国経済循環の法則との矛盾展開→「解体」要因へ）から Arpanet = 情報革命（Net 新世界の「包摂」→Net = コミュニティの論理と資本・国家の論理との矛盾展開→「止揚」要因へ）への主題 [主要矛盾（『基本矛盾』の展開=段階基軸）] の推転。

1. 同じ情報革命といっても、コンピュータシステムの生成の段階【「マンハッタン」計画→核=ミサイル戦略下、情報処理の中央集中化基調の大型汎用機の全盛期（65 年 IBM360 シリーズ！）とはちがって、いまやそのシステムの Net「新世界」への転成【「スプートニク」→「ベトナム戦争」下、Arpanet 創出（69—）を転換点=転換軸とし、ME 革命の新展開を技術的基礎とする、コンピュータシステム（情報処理）のパーソナル化（分散化）とネットワーク化（共有化）への転回基調】が主題となる、まさに《20 世紀末大旋回》下の情報革命、その歴史的位相が問題なのだということ。
2. それはもはや、技術上の革命の域をこえ、直接に社会・経済生活、その編成原理と主体形成に及ぶ「新世界」の生成を含むものとして現われてきていること。1) 一方ではコンピュータシステム自体が、資本と国家が独占する command—control—communication の道具という、その生成期を軌道づけた在来型の役割には止まらず、むしろその反対物ともいべき、Net でつながる自律的な諸個人=集団相互の global に開かれた communication—collaboration—community の「新世界」の創出基盤という原則的に新しい役割の成長を担い、2) それに対応してまた他方では、資本と国家の側からするこの Net 新世界の取り込みと制圧への『大突進』も必然となり【90 年代以降—そのための新たな金融的枠組みともなった Net 株バブルの世界的狂乱（金融革命の線）またそれら全過程の世界史的前提たると同時に帰結ともなるポスト冷戦下のグローバリゼーションの「市場原理主義」的強行（世界市場革命の線）とのまさに三位一体をなして現出した『大突進』（「世紀末」の絶頂へ）】そこに成立する原則的に新しい矛盾=対抗、その絶対的で世界=同時的な展開が「21 世紀型」危機（現下の「新しい恐慌」「新しい戦争」の名で始まったそれ）への軸線を構成するに至ること【同時に、この軸線はここで、同じ危機の世界史的前提をなし構造的基盤をなしてきた 60 年代末から 70 年代初頭以来鮮明になる戦後冷戦体制の解体過程と資本主義のアメリカ的段階の終焉の問題（冷戦下、IMF=ドル体制で枠組まれた資本主義経済最後の統一的世界編成の解体—その『総括』主=冷戦帝国主義アメリカの 1 個の掠奪的覇権国家=反革命軍事テロ国家への転落）と連繫し、かくして《20 世紀末大旋回》として始まるこの人類史的過渡期の全体像（現代資本主義世界の Apocalypse）へと迫ることになる—末尾添付資料(2)《ひとつの歴史図式》参照】。
3. 報告は、さしあたり 2—4) の側面の闡明にしばられるが、それはなによりもまず Net の生成史のうちに集約的に開示され（以下の A、B 2 段）またこの側面の強調にこめられた主題構成上の含意は行論のうちに示される（→ **結びにかえて**）。

A. 「スプートニク」（1957 年）以来 40 年に及ぶ Net 生成史が語ること

1. Net は資本がつくったものではない（むしろ資本にとっては「晴天の霹靂」として現われる） — ここに Net の本質があり、機械とはむろんコンピュータとさえちがうその歴史的位相、核心が集約されている。
2. 資本は科学をつくらない — この定言が Net 段階にもつ資本にとっての特殊に致命的な意味【科学の技術学的应用部面への社会経済生活の不断の転化というだけでなく、いまや資本循環の現実的進行のテンポ、広がりをはるかに越え、まさに指数函数的なレベルへとシフトを示すこの分野の科学技術の展開=速度のことひとつとってみよ —

Moore's Law から Gilder's Law へ、さらに總じて資本主義「企業」自体の存立を問うに至る Linus's Law へ（Linux→研究開発の新しい定型 = Net 段階としてのオープン・ソース・プロジェクトの多方面 = 世界大の拡がり）。情報革命の「本流」と「逆流」（派生 = 寄生物）への分化。

課題の成立 Net は誰によってどうしてつくられたか—「Net 先行」の問題

「冷戦」という大状況、それもその大状況にひとつの転換を画してゆく「スプートニク」と「ベトナム」の独自の役割がまず問題となるが、さらにこの場合より重要なことは、そうした状況の転換を、さらに対応する事業自体の性格の転換（国防省の軍事企画 Arpanet の Net 「新世界」への転成）へといわば再転換 = 転換してゆく新しい主体と運動の形成の側にある。即ち。その転換を自らの新しい科学者としての自己実現と Net 上に拡がる開発者 = 利用者 = 運動者相互の新しい communication—collaboration—community 形成へと転換してゆく「一般的労働」の新段階、いわば Net 段階とのかかわりにある【18 世紀末→19 世紀型の「私的科学（発明）の英雄時代」→19 世紀末→20 世紀型の「産業界と国家の科学の（その枠内に囲いこまれ制度化と軍事化の道を辿った）時代」の止揚を志向するそれ。例えば Net の標準・規格採用を特徴づける Request for Proposals(RFP)—Request for Comments (RFC)方式の創造（69—）と後年その作業組織となる Internet Engineering Task Forces (IETF 86—）の発展——そこでは、提案から採用に至る全過程 = 全手続きの Net 上での世界全公開、企業や国家の「代表」を排した審議過程への個人単位での自由参加、そして採用の要件としての企業や国家の利害をこえた広範なユーザーによる Net 上でのテスト実績の重視が原則、つまりは ISO など従来の官僚的な国際標準化機構とはちがって、IETF の機構自体が Net 機能をフル動員した世界の関心ある科学者・技術者・運動者個人からなるオープンでボランタリーな集団作業の形へ進み、69 年の Arpanet の成立以来の慣習として採用規格を定義し番号を付して記録する「RFC 文書」の数も 3000 を越える（広義のフリー・オープン・ソフトの龐大な世界的集積——後出の Net 上で生みだされる Linux—OSS コミュニティ形成、さらにその前提をなした R . ストールマンの GPL 制定、またある意味では国連会議やその他の国際会議の NGO 化の流れのいわば原点・母胎がここにある）。さらにまたこうした新しい段階の歴史的背景・基盤ともなった公民権運動、ベトナム反戦運動の世界的高揚、この場合とくにその中心舞台となった大学 = 学生叛乱の “sixties” とのかかわりとともに。

ともあれ、同じ軍事プロジェクトの産物とはいえ、Net 以前のオープンハイマー = フォン・ノイマンのそれとの段階差、E . テラーのそれとの明らかな対極性を示す（さらには一般に軍事技術の民間利用ともちがう）Arpanet の Net としての生成、それを軌道づけるこうした新事態こそ、20 世紀末大旋回の一基調、情報革命の「本流」をひらいてゆく。 末尾の資料(1)図式参照

B. 90 年代をつうじる Net の 新世界 としての自己開示 = 展開が語ること

1. Net の機能世界（アプリケーション）の本格的開示としての W.W.Web 開発（Net 情報のハイパーリンク化——T . バーナーズ - リー 89=91—）とその大衆化（GUI 化 = MOSAIC 開発と PC への移植——M . アンドリーセン 92=93—）。まさに **独自の = Net 的な情報・通信インフラ** の先行定位〔双方向的でグローバルな新しいコミュニケーションとコラボレーション、それをつうじる新しい社会運動 = コミュニティ形成のための豊かな舞台装置形成〕。

既成のマスメディア（放送、通信）、ニューメディア【93 年の FS net [VoD]、一般に各種乱立した商用コンピュータ net { LAN (Lotus), VAN-EDI etc } さらに 94 年以前の A . ゴアの NII 構想、DOD の CALS などを含める】の制圧 = 止揚へ（メディア「無血革命」！）。

1995 年を画期とする資本と国家による『Net の発見』(V.サーフ); Net の民営化(1995 年、Net のバックボーン・トラフィックの ISPs への開放)と雪崩をうつ「Net 対応」への『大突進』(1995 年のシグナル——5 月 11 日ビル・ゲイツによる「Net 発見」メモ “The Coming Internet Tidal Wave” 指令→12 月 7 日パール・ハーバー記念日に当てた MS の “Internet Strategy Day” の大デモ演出)そして Net バブルの開始(1995 年のシグナル——Web ブラウザ開発元「ネットスケープ」社のナスダック市場への IPO、初日値上がり率 2.5 倍へ)

参考 「Net 対応」の評価基準(1)—Net=Web をベースとする「オールド・エコノミー」のリストラと「ニュー・エコノミー」の創出。

- (1) 意義。新しい Net=Web 環境の巨大な潜勢力の資本循環=再生産軌道への戦略的=選択的なとりこみ、それをつうじる 80 年代以来、製造部門から業務総体へ、さらにボーダレスな資材部品調達へと無秩序・無連絡に拡散してきた企業リストラの諸形態=手法 (PPR, BPR, SCM etc) の Web ベースでの統合的再構築、その限りでの「情報化のパラドックス (R. ソロー、87 年)」の「解消」へ (Intranet—Extranet の線)、新しい「e マーケット=ビジネス」のための多様なモデル構築、メソッド開発からその「特許」化の狂奏へ (B-C、B-B、M-M、C-C の線)。

90 年代後半期を染め上げたまさに「歴史的」な株高【95 年のネットスケープ社の新規株式公開 (IPO) を起点に、IPO の期間累計 450 社、そのピーク時の時価総額はゆうに 1 兆ドルをこえ、それを直接媒介=演出したベンチャー・キャピタルへの支出だけでも年間 1 千億ドル (2000 年) に上るまさに「狂乱」の Net 株ブーム=バブルが牽引者】それに先導され支えられた、これまた「歴史的」な高投資 (圧倒的な Net 関連 IT 設備=ソフト支出)—高 M&A (圧倒的な株式交換方式)—高消費 (株式=資産効果) の実体的基礎。

—總じて「米日再逆転」から「アメリカ独り勝ち」の一時代の演出へ。

- (2) 限界。その戦略的=選択的とりこみ自体のはらむ新しい『絶対矛盾』の成立と展開【分散=公開=共有 の Net 環境の枠内での 集権=閉鎖=独占の資本論理の実現——とりわけ「新しい恐慌」の火元と化した「e ビジネス」総体の惨状 (“Internet Depression”!)、さらには次項 2 への**参考**で摘記する諸問題の成立の基礎にあるもの】。

さらに、この実体的矛盾の展開を媒介=隠蔽=増幅してゆく金融面が孕む新しい諸問題=諸限界の極限化。

[] まずは、總じて資本のこの《Net 対応》のための新しい金融的枠組み (=「蓄積様式」) ともなった、先の「歴史的な」資産=株式バブル(「不合理な熱狂 irrational exuberance」—96 年 12 月 FRB 議長) への全経済過程の依存の問題【神を恐れぬ「バベルの塔」ならぬ経済法則をも没却する「バブルの塔」の構築 (因みに日本の 80 年代後半はその日本=「植民地」型リハーサル)】。——ここでは「バブル」はもはや好況過程の一時的な「行き過ぎ」などといった通常の意味をこえている (そうでなければ、その崩壊はむしろ歓迎すべき安定=正常化の一契機を意味したろう)。90 年代のブームをリードした シリコン・バレー の名で喧伝されるベンチャー・ビジネス=リスク・マネーのファイナンス、そのアメリカ型新機構 (→NYSE と Nasdaq との連繋) の創造にみるように、「バブル」はこの場合逆に、90 年代の好況にとって、つまりは資本による Net の取り込みにとって、不可欠な金融上の前提=基礎、枠組みをなし、その意味で 20 世紀末大旋回 推進の一基軸=「金融革命」のアメリカ型の正常で必

然的な一帰結としてあらわれる。少々長くなるが、その点にふれておけば——もともと金 = ドル交換停止と金融自由化で不断の為替 = 金利リスクにさらされた金融資産の、『証券化』と『デリバティブ化』(スワップ・先物・オプション) それらをリスク特性に応じて組みこむ集合的投資スキームとしての『ファンド化』(71 年の MMF にはじまる各種の『金融商品』の開発と市場形成 = 「マネーゲーム」化) による価値保全 = 投機的利殖化の新水路開設として始まったこの革命が、75 年の証券改革法 (メーデー) と Nasdaq 市場開設を前提に、90—91 年不況への米国版「ゼロ金利」対策 (92—94 年) に誘導されつつ、やがて資本の Net ラッシュとともに、さきの「歴史的な」Net=株式バブルをファイナンスする巨大な水路と新機構の形成へと進んだアメリカ型の道の一帰結にほかならぬ【例えば「福祉国家」の解体に対応する 4000 万人をこえる 401K 加入やストック・オプションの盛行などが示す通り、一般貯蓄性資金から年金基金、さらには賃金部分までも吸い上げ、總じて一国のマネー・フローの「公共 = 貯蓄性機関」「銀行」から証券 = 株式投資市場へのシフト、一般生活資金の「保障」循環の破壊、投機的金融資産の奔流へのその組み込み・依存に導いたそれ——因みに、冷戦 = IMF 体制下のケインズ的な財政 = 所得ベースの《軍需 = インフレ的蓄積様式 (ビルトイン・スタビライザーをもつ New Economics = 「福祉国家」ポーズ)》との段階 = 範疇差、明らかな「終末期」の象徴。→「新しい恐慌」への一視点ともなる戦後循環の「安定化」基盤 = 「個人消費」の聖域崩し】。

〔 〕とりわけこのバブルの蜜に群がる世界の資本のアメリカへのラッシュ (長期資本ベースでも 2000 年には年間 1 兆ドル水準へ!) そこに経常→資本収支の両面から極限化するアメリカの対外赤字とその反面にほかならぬ世界経済のアメリカ = 株式バブルへの依存、この双方のあいだのものはや絶望的で維持も復元も不可能にみえる「運命共同体的」一体化の關係の形成、他方この關係の全内実を貫きグローバルに広がる経済・社会・文化、否人間生活 = 生存上の『格差』 = 差別の世界破局的な急拡大の問題【因みに、アメリカ型グローバリゼーションのこの両面的帰結こそ、一方民衆の側でのそれに対抗する世界的で多様な反対運動の後述する新しい連合の形成 (Net Inter へ) の、他方ではおよそ国家という階級的政治的支配の形をとり、その支配統治の側にたつ限り、もはや欧・露・中 等々の別なくブッシュの一声に唱和する現下の「反テロ」 = 反革命国家テロの新しい世界連合形成 (冷戦体制にかわる新しい「戦争体制」) の、現実的基礎を構成し、その対抗が全局を制約する】。

〔 〕そして最後に、この極限のドラマの底にひろがり、その進行を支える冷戦と IMF 体制の原罪、世界に垂れ流された膨大なドル残高の、71 年の解体 = 変動相場化以降は公然化し死重化する堆積とその世界的投機資金としての、「デリバティブ」 = 「オフ・バランス」化し on line→real time 化する膨張力と浮動性の破壊的脅威の問題 (基軸通貨 = ドル問題との危機的連繫)。

——以上要するに、Net 利用の独占にたつ先の「アメリカ独り勝ち」の世界も、この総体的視野のなかでは、Net 包摂 = 利用の資本主義 = アメリカ = 世界的カリカチュアの一時代へと転変する。

(3) 展望。こうした新たな矛盾展開を『通路』とする **独自の = Net 的な社会経済計画** への展望 (on line→real time の調整機能を持つ分散型でオープンな regional で global な「生産と分配との社会的運営の機構」の形成へ) —いわば「Net の市場化」から「市場の Net 化」へ。

2.この新環境のうえではじめて成立してくる Net enable な「作品例〔旧い支配の 3C (command—control—communication) に抗する communication—collaboration—community 創出の新しい 3C の先進事例〕として—

1) **独自の=Net 的なコンピュータ基本ソフト OS** Linux の Net 世界「標準」としての先行成立【L.トーバールズ、91 年 Net 上のニュースグループに向けた“a program for hackers by a hacker”として Linux OS の kernel のソース・コード公開・共創呼びかけ、94 年その成果第 1 版リリース、以降急増するユーザー=プログラマーとの頻繁なリリース=フィードバック(週・日単位!)で開発ペースの急上昇へ—Net 上でのソース・コード公開=共有にもとづく大規模な OS のまさに世紀の共同開発の初達成、まさに Net enable な、したがって Net 最適 (Unix 系譜) の OS として—「Net の奇蹟」!】

商業世界に君臨する Windows【Net 以前(むしろ没 Net)のオフィス業務対応の OS=MS—DOS をベースに「アプリケーション付加」で Net 段階の新事態にも対応するしかない設計=戦略上の限界—「際限のない OS の肥大化」『PC バブル』!】の止揚への方向づけ。

2) その開発=利用方式としての **独自の=Net 的生産様式** GNU/GPL/Linux (→オープン・ソース・ソフト) コミュニティの先行創出=拡大。

—ユーザ=プログラマー一体のコミュニティによる基本的生産手段(ソフト資産)の共有=共創【GNU/GPL(General Public License—copyright のとらえ返し“copyleft”——R.ストールマン、85)下のフリー・ソフトの戦略的防衛と管理、集積と自己増殖の機構の法制的整備と構築。無拘束な Public Domain Soft との範疇差(例えば Linux の場合、GPL の下で、リーナスのカーネル部分の著作権のほか、数千人がそれぞれの開発部分の著作権をもつ)さらに forking で崩れ去った旧フリー・ソフト Unix の限界止揚】

—Net による世界の頭脳数千のオープンでボランタリーな協働の組織化、まさに独自に Net 的な生産様式としてのオープン・ソース開発方式の彫琢と標準化【商業世界を縛る企業と企業秘密の枠、その下での賃金奴隷制的開発方式、さらにそれと応答的なソフト開発工学の古典則 Brooks's Law (ソフト・クライシスの象徴)の限界止揚→それを告白する MS の秘密調査「ハローウィン文書」98.10】

—もいわば フリー・ソフトによるフリー・ソフトの生産 の新しい基盤と様式の創造 (Net 上での資本主義的生産様式の止揚。その Net 世界「標準」から「市場標準」としての浸透へ—下段参照)

参考 「Net 対応」の評価基準(2) —Net=Linux (OSS) コミュニティをベースとする新しい分化。コミュニティの論理と企業=資本の論理、国家の論理との矛盾=対抗=相互浸透のダイナミズムの展開へ(さきの『絶対矛盾』の新しい展開形態—前項 1 への参考参照)

Linux(→OSS)ディストリビュータの形成と株式公開(95 年設立の最大手 Red Hat 社、99 年ナスダックでの IPO へ、同じくバブル崩壊前夜の同年末 IPO の VA Linux System 社株の初日値上がり率じつに 8 倍、過去最高へ)さらに中国の国策的参入(OS「紅旗 Linux」00 年、Linux 対応の AS「レッド・オフィス」01 年)

新独占 Wintel 支配(90—95 年で確立—Windows 95、Office 95、MSN 導入)の分解

Linux 対抗の MS 2000 年戦略=「MS ドット・ネット」戦略〔Net 関連事業全般へ触手をのばす「アプリケーション付加」ビジネス(抱き合わせ=

囲いこみ商法)の極限へ)。

Linux 利用環境の開発整備を狙う反 MS 連合 (IBM, Intel, HP はじめディストリビュータ大手をも含む世界有力 19 社による NPO「オープン・ソース・デベロップメント・ラボ (OSDL 2000 年)」設立) とりわけ盟主 IBM の 10 億ドルの巨費を注ぎこむ「新 Linux 戦略 (2000.10)」(誇り高い伝統的「自前開発主義」放棄、提携 = 寄生戦略による「ソリューション」ビジネスへの転向 (サービス業化))。

展望としては、こうした過程をつづじる開発主軸の **独自の = Net 的生産様式** としての Linux OSS コミュニティへの移行 (生産主軸のアジア中国への移行と対応)。

さらに Net バブル崩壊下、Napster 起点での **P2P 運動**の急激化。アプリケーションからプラットフォーム、さらにインフラ領域に及ぶ一切の仲介者 = 独占的機構の排除 (Web サーバ (ISPs) もコモンキャリアも)、自律的な諸個人としての直接 = 常時接続環境の創出へ (ブロードバンド = 光通信 Net 前提) また同時に、現下の危地脱出のための新方途を探る資本と国家の側からの参入へ。

—— Net の歴史における新しい段階への予兆 (Web 以前 → Web 時代 → P2P へ、いわば『第 2 の否定』 ?)。

3) 以上に対応する市民 = 社会運動の再構築 = 新段階。 **独自の = Net 的な社会運動の国際連合組織** IGC = 世界最大の NPO / **APC** = 世界最大の NGO の創設と展開 (peace - eco - labor - woman net... の分散型連合 1986 - 87 ~)。

伝統的な**草の根**のうえに、国家と企業の枠をこえてひろがる Net 新世界の**草の根**を構築するアメリカ = 世界市民運動の新段階。企業と国家の枠を破れなかった 20 世紀社会 = 労働 = 政党運動の解体と止揚の一方。またそれは、本来的に相互の利害の対立に阻まれる資本 = 国家の連合にも**先行**し、それを超える実力をさえみせはじめる。

—— Net インター としてのインターナショナルの歴史の再生へ (同時に、国家と資本の世界 = 総力をあげての反撃の開始 — 「新しい戦争」 ! —— とくに、この文脈での『2001.9.11』の位置)。 後掲の資料 (1) **図式参照**

結びにかえて (「経済学」以前へ、そして「経済学」批判へ——[附註]参照)

情報革命への接近は、まずもって、上の A,B の本文に摘記した「本流」に即してなされるべきであって、商業利用の表層 (「逆流」) にとどまってはならない (とくにこの本流 = 運動とは無縁で、ただその成果が商用化された「IT」 = 技術として輸入され、それも「日本的経営」のうえに接木されてきた「情報後進国」日本としての自戒 !)。

この「本流」だけが 18 世紀末大旋回 19 世紀末大旋回 上でそれぞれ展望されてきた「将来社会の物質的前提の成熟」「主体の陶冶」の次元には解消しきれない、まさに 20 世紀末大旋回 で始まる人類史的過渡期の推進力としての、この革命に独自の歴史的位相と役割を開示してくれるからだ (末尾添付の資料 (2) **ひとつの歴史図式** 参照)。つまりは、たんなる技術や産業の革命には解消されない、分散と共有 という新たな原理で枠ぐまれた Net 新世界 の創造のことを、そしてなによりもその新しい環境世界の発展が Net につらなる諸個人とその連合に付与してゆく巨大な社会的 = 創造的 = 組織的力能のことを開示してくれるからだ (「Linux」や「Napster」の先進事業や「シアトルの闘い」が予告した主体の革命、新しい 3C にもとづく “ Power to the People ” への展望)。

逆にいうと、この新しい世界、新しい主体をつかむことなしには、いまやほかならぬその新世界の取り込みと主体の制圧に血道をあげる資本と国家のつくりだす新しいレベルの

矛盾＝対抗の成立も問題にならず、その矛盾＝対抗の『絶対』化（体制内処理、国家間疎な嫁＝処理の不可能化）とその展開の世界＝同時化（地域的封殺、時期的拡散の不可能化）のことも、したがってまたそれをめぐる階級闘争の新しい主戦場、陣型形成、戦略配置のことなども、要するに現下の「新しい恐慌」「新しい戦争」として始まった「21 世紀型危機」【資本と国家にとっての当面の策としては、破綻し全崩壊に瀕した世界株式バブルの政策的支持と再現への狂奔（ついでに日本ではその前に破綻した全金融システムの救済）世界民衆生活の全般的切り捨ての本格化、そしてかつての「反共」＝冷戦にかわる「反テロ」＝「新しい戦争」の名における際限のない ultra＝cyber ファシヨ的な社会の“ Panopticon ”（窮極の監獄）化と国家＝軍事テロの世界的で連続的な発動しか残されてはいない】の位相や展望も、問題になりえないからだ。

以上、一言にして、情報革命の「本流」の確定こそ、この革命が担う人類史的過渡期の突きつける歴史の主題（資本主義世界の Apocalypse！）に迫るためのまず第一の要件、否 第一の抛りどころをなすものだからである。その意味で、この Net 上にあらわれる新たな歴史的主体（諸個人）の評価、位置づけが、遠くは歴史に登場する“ individuals ”の役割との関連で（「古典古代の最盛期」→階級社会の形成と「近代の初頭」→階級社会の完成、国家の諸類型化の 2 つの場合との対比）近くは 18 世紀末大旋回 以来の「近代プロレタリア」の世界史的事業（階級社会と国家の止揚）とのかかわりで、主題追求の全行程をつうじて問いいつづけられるべき基本問題を構成する。

【附註一再録】 なお、蛇足ながら、8 年前の拙稿からその初めと終わりに当たる次の 3 文をここに抽出＝再録することを許されたい（「ME＝情報革命の基本的性格—『ポスト冷戦』段階への基礎視角」『三田学会雑誌』87 巻 2 号、1994 年 7 月刊、26～28、39、44 の各ページ）。むろん当面の『Net の発見』にはほど遠いが、「もとより『門前』にもおらぬ門外の、『小僧』にもなれぬ（この）老骨」（40 ページ）をさえ衝撃した「情報化問題」との往時の出会いを想起し、また望むらくは 日残りに暮るるに未だ遠し を願いつつ。

1. ...（メイン・フレーム支配の在来体制を崩し去る 90 年代はじめのパソコン化とネットワーク化の急展開からの「衝撃」をうけて）...「ME 化」とそれにもとづく「情報化」の問題を、もはやなにか特殊部分問題として処理することは許されまい。かつてのように、軍事的な、先端技術的なあるいは個別生産＝経営管理的な、といった多かれ少なかれ限定的な問題領域にだけ限ることはできない。端的にいって、それは、まずなにより「ポスト冷戦」という形ではじまるこの新しい歴史時代の総体の編制にかかわり、その人類史上に位置と展望を扼するものとして、いままさに課題の焦点にすえられねばならない、ということになる。あたかも「分業」が A・スミスの経済学のなかで、「機械」がマルクスの体系構成のなかで付与されたのにも似た「強調」を、「情報化」の現代はようやく社会の科学に要請するに至ったのだ、というべきかも知れない。たとえ——、過程はなお、いぜん「ポスト冷戦」下の資本主義の古いカラの中で、世界的リストラという「煉獄の時代」を通過しつつある、否通過しはじめたばかりだ、としても。
2. ... 以上、一言にして情報ネットワークのそうした高度＝戦略的で高度＝資本主義的な利用が不可避となればなるほど、それを支える絶対的保障として、前段で示したこの情報ネットワークの技術学的本性の実現とそれがつくりだす新たな情報化世界の法則の貫徹が、もはやたんなる技術学的展望としてではなく、同時に、その利用をつうじてこのネットワークと一体化した資本じたいの経済的に戦略的な要求として、まさに「死活問題」ともならざるをえない。すなわち、このネットワークを担う労働の全階層各個人の全面的発達、とりわけその意識世界の拡大＝高度化が、したがってまたそれを制度的に保障するさきの情報公開＝共有と決定権の分散化が、いまや資本にとっての「死活問題」とならざるをえない。だがこの新たな要請も、あたえられた全舞台＝全過程を依然私

私的＝資本主義的なそれとして梓づける最終的制約＝基盤——私的＝資本主義的所有（「労働と所有の分離」→「労働と決定権の分離」「労働と知識の分離」の梓組み）と絶対的に矛盾すること、明白であって、資本はいまや、そのいわば最後の地点に追い込まれる——そこではまさに資本の杵を乗り越えることが、ほかならぬ資本として生き残るための要件となり強制となる！そしてこれこそ、マルクスが成立したばかりの英国「工場立法」、その貧弱な「教育条項」のうちに早くも透視した、変革へのあの「唯一の歴史的経路」の今日に見る姿にほかならない。再びマルクスにならっていえば、大工業の出現とともに「恐るべき痴愚」となったのが「靴屋は靴屋の本分を守れ」というかの「手工業的知恵の絶頂」であったとすれば、いま新たな情報化世界の出現とともに「恐るべき痴愚」「恐るべき時代錯誤」となるのは、「知的所有権をまもりひろげよ」という、いまや追われる身ともなったアメリカによって口授されるこの資本主義最後の「知恵」、その今日的「絶頂」であり、さらにはそれをつうじて舞台の中央にひきだされざるをえなくなる私的＝資本主義的所有それ自体なのである。

3. ...最後に。——かつて「大工業」を「マニファクチュア」のメガネでみる愚を戒めたマルクスの知恵に倣うとすれば、いまはもう2段ばかり進めて、次のようにいふべきではなからうか。急激化する現下の「情報化」の進展＝展望を、「大工業」のメガネでみる愚を重ねてはならない。さらにいまひとつ、その「大工業」と応答的で、それをほかならぬ「独自に資本主義的な生産様式（資本のもとへの労働の実質的包摂）」として梓づけてきた、「商品」＝「資本」のメガネで計る愚を犯してはならない。

追記——もっともその資本主義のメガネにさえ合わせていの「日本型情報化」の現実を目を凝らすとき、問題はそれどころではない、としても。むしろこの国の場合、逆説的だが、冷戦終結と「Netの発見」こそが逆に過去の歴史の全問題を明るみに出す、つまり1868年、1945年をつうじて積み残し、積み上げてきた歴史の課題【日本資本主義の『軍事的＝半封建的』→「冷戦植民地的＝格差系列的」『型制』の揚棄——一時は必ず忘却されむしろ裏返し表現（“ Only Yesterday ”のJapan as No.1の大合唱を想起）をとって罷り通る日本的『古層』のあの野蛮で専制的、卑屈で安易な「近代的」形相の総決算の課題】を一挙に、まさに全機構的な問題としてクローズ・アップし（但しまたかの裏返し表現の再販として——まさに「植民地的」なアメリカ猿真似の、より正確にはアメリカ指令の『構造改革』の大合唱→全機構的破滅への道）またその破滅の「煉獄」を通じてはじめて、かの歴史の課題の同時＝最終的で世界的＝人類史的な総決算＝解決への途を準備し促迫するに至るのだ（3度目の正念場——歴史の弁証法）というべきでもあろうが。

四式

旧3Cの部から新3C(主線形式)基盤への
の移行が主だ!!

"On distributed communication networks"

軍(バグット交換) → DoD(空軍) ⁶⁵ → ^{ベトナム}

interactive computing (→ PC)
networking (→ Net)

69-72
Arpanet (西部4大学ノード間パケット通信実験成功)

(774-78) AIX, Alpha, HP, PowerPC
 (Kashyap, V. P.)
TCP/IP (81-83, Unix-BSDベースで実現)
 << net, net v. 1.9 NetX - Mithat 分属 >>

WWW Web (89-91-93) Net 北美網指示
CERN Net PC 聯機

91 = 94 - 3 (L-パルス)

GNV/GPL/Linuxベースのコミュニティが、
→ オープンソースソフト包の展開 - OSI 設立 (98)
(E. リモント)

證明地址 (未換)

民衆データベース(分級-基本-公開) → 旧 CIA 集約はさる?
民衆の口陰合戦(ニュースグループ
電気通信社、200以上設置) → 口達とさる!
民衆の口陰統一行動 → 92 リオ・アスファミット, 98 北米対話会代組織 5人
99 エアトル - クイ人
01 ジェバ(WTO)サミット-20

← ドハ WTO (01)

《木下冷哉研究会報告(2001.12.15, 於明治大學)資料 司克吉》
(增補改正 02/1月)

(ENIAC(45)
(EDVAC=ノイマン式(45)
MANIAC(52)ノイマン式

(適用版)
Xmivac(5)

IBM360 (65)

Intel 8080 (74)
IBM-PC (81) ← Apple I (78)
Windows 3.11 (90→95)
Windows 95 - Office 95

資本と労働のNet見 (95)
Net 社会主義とバブル

- Winsock 2.0 の理解 (98 -)
- NetBios の理解 (00 -)
- P2P の理解 (00 -)

14 世紀来の文化革命→政治革命(1647、1776、1789)

↓

18 世紀末大旋回 産業革命(機械と大工業)→産業資本確立と近代プロ形成。「独自の=資本主義的」生産様式と資本による労働の実質的包摂の成立。

19 世紀末大旋回 重化学工業化→独占=帝国主義段階へ移行

ヨーロッパ「旧世界」の危機(→ロシア革命-「戦争と革命の時代」)=同時に「新世界」アメリカの成立【→資本主義のアメリカ的段階の発足—
—「旧世界」再建(「相対的安定」→冷戦体制包摂)とソ連の「一国社会主義」封じ込め、20 世紀型社会主義転化】

1. 大戦とロシア革命→29 年大恐慌→国独資転化

2. 大戦と中国革命→冷戦→大陸的国家米(ソ)「体制的」独占=冷戦帝国主義(冷戦社会主義)へ総括

資本主義経済の統一的世界編制としては最高(→最終)形態(最終の国際通貨体制としての IMF=ドル体制の意味)同時に解体と
20 世紀末大旋回への動軸の built-in(20 世紀科学革命と冷戦と軍事 B との連結=展開線)

20 世紀末大旋回 冷戦体制解体と冷戦後世界再編を軸とする新たな「人類史的過渡期」の開始(情報革命の展開線 Net 先行 - Net 対応 - Net 包摂を基本軌道とし、資本と国家の止揚へと向かうそれ、Net にもとづく新しい International の再建へ)

冷戦体制解体の世界史的帰結——20 世紀型社会主義の終幕と資本主義のアメリカ的段階の終焉〔1 個の掠奪的覇権国家転落、総じて金本位制崩壊
(29 年大恐慌→)民族国家壊滅(核冷戦体制移行→)の流れを締めくくる資本主義世界「総括」の最後の支柱=防塞の撤去〕、同時に情報通信革命と世界市場革命との世界史的相関の開始

1. 1971—81—91 冷戦=IMF 体制解体過程〔体制間軍事対抗の強圧と体制内統合の負担(「日本化」→「アジア化」)の相関〕、そのもとでの ME=情報化と金融自由化=国際化起動→レーガニズムへの総括(労働制圧とサプライサイド=リストラ、財政から金融への転轍)

2. 1991 - 95 - ポスト冷戦戦略下での情報=金融革命の新段階移行——『Net の発見』=民営化(95→)を一大画期とする情報通信=金融 新世界 の形成、その 新世界 の独占的掌握(「新独占」)をテコにその姿にあわせた(「グローバル・スタンダード」)旧世界の全般的リストラの強制、つまりはこの「人類史的過渡期」の 資本主義=アメリカ的ラウンド の本格的起動と「21 世紀型危機」の開始へ。